

(1) 教育の責任(何をしているのか? 担当科目は?)

彫刻基礎 I・II

1年次、前期基礎 I において、彫刻の特性及び、立体表現の基本的な概念について理解することを目的とする。塑造＝モデリングを通して立体的な創造を学習する。初歩的な学習方法として、具象的な対象物、「静物」の野菜や、果物を各自選択して、それら立体の持っている形態、フォルム、量感などのかたまりの特徴を観察することで、心棒に土付けして塑造の基礎を学ぶ。完成後講評会を行う。その後、粘土の作品を石膏取りして、雌型を取り石膏を流し込み、割り出して石膏作品として完成する。後半、ダンボールを切断加工、接着するペーパーワークを通して、構成的な集合彫刻を学習する。完成後講評会及び、プレゼンテーションを行う。

1年次、後期基礎 II において、粘土によるモデリング表現として、具象的な対象物も含め、イメージの世界を空間構成して、「風景彫刻」を表現する。後半は、テラコッタ粘土を使用して、手捻りによる現代の土偶、埴輪を制作して、内割りして完成後講評を行う。乾燥させ窯で焼成する。

彫刻 I・II

2年次、前期 I において、塑造制作を通して、友人の「頭像」を制作する。作品完成後講評を行う。その後、塑造作品を石膏取りして、雌型を取り石膏を流し込み、割り出して石膏作品として完成する。2年次、後期 II において、実材彫刻＝カービングとして、素材は石材を加工して制作して表現する。テーマは、「芽吹き」、「萌芽」として、生命感のある抽象形態をイメージして、モチーフを石粉粘土使用にて制作して、直彫り技法を通じて石彫作品として完成させる。完成後講評会を行う。約12回程度制作して、残りの期間は、木材のレリーフ彫刻などを通じて、彫刻刀の使用法を学習する。

彫刻 III・IV

3年次、前期 I において、塑造制作を通して、モデルさんの「人体全身像」立ちポーズを、2時間ポーズを6回の時間内に、約60cm程度のサイズで制作する。完成後講評会を行う。その後石膏採りを行う。後半は、小さな頭像を制作して、石膏取りをして、テラコッタ粘土による型込めができるようにする方法を学習する。型が完成したら、粘土を板作り加工して型込めして完了、乾燥したら型を外して、しばらく水分が無くなるまでの期間乾燥させ、頭像を窯に入れ焼成して完成。

後期 II において、実材彫刻＝カービングとして、素材は木材を加工して制作して表現する。具象的な生き物、哺乳類の全身、頭部、あるいは、鳥類、両生類などを、イメージしてモチーフを石粉粘土使用にて制作して、直彫り技法を通じて木彫作品として完成させる。完成後講評会を行う。

卒業研究 I・II

4年次、前期 I において、卒業研究を彫刻にて履修する学生に対して、毎週1コマゼミを行い、素材研究エスキース作りなどを通して、実際の作品制作に向けて、どのような表現方法で取り組むのかに

ついて検討する。決まり次第、実際の手順に従って、表現する材料や道具などを揃えて、形にしてい
き、構成していく。空間などについても学習する。

後期Ⅱにおいて、前期において取り組んだ作品制作を続行して、完成に向けてあらゆる方法を駆
使して表現の密度を上げていく。

(2) 教育の理念(なぜしているのか？ 何を信じて教育をしているのか？ 学生にどうなって欲しいか？)

彫刻の基本的な表現方法においては、立体感覚を高めていく要素として、ものの形態(フォルム)、構
成(ストラクチャ)、動き、動勢(ムーブマン)、空間(スペース)の要素を確認して表現の段階的なレベ
ルに押し上げるために数多くの作品を制作する。なぜ必要なのかは、立体を把握する造形力、塑造力
を身につけることで、絵画などの二次元空間における表現力をさらに三次元空間の把握まで高め、相
乗効果で美術全般的な力が身につく効果がある。

学生にどうなって欲しいか？については、立体作品が持つ空間における塊、量感の持つ力強さ、伸
びやかさなどを確認する力量を身につけてほしい。学生には、ものの全体と細部の関係において、響き
合う力関係について感覚として身につけてほしい。さらに、素材や、材質など、ものが持っている質感
や、重量感などを感じながら、どのような抵抗感を持って、道具を使用して加工するなどの柔軟性を学
んでほしい。

(3) 教育の方法(理念や目的を達成するためにどのように実践しているのか？)

学生に対して、制作工程の段階的な過程、および段取りを常に意識しながら、表現効果を生み出す
ために次の工程に進んだり、また元に戻ったり、思考を働かせること。対象物を見ながら粘土にて制作
する塑造(モデリング)などの場合は、対象物を観察して、自身の作品を見比べながら、正確なプロポー
ション、動き、構成、バランスの他、形態感なども含め、新たな発見を重要視させる。そのためには、確
認作業を怠らず、常に疑問符を持ちながら自己問答して、比較しながら修正を繰り返すことを実践させ
る。

彫刻(カービング)など材料を加工する場合も、エスキースなどの模型を見ながら制作していく直彫技
法においては、形を見ながらに忠実に粗取り、粗彫りしていくことを実践させる。全体の形態を大きく見
せるために、必要以上に量を落とすことなく、面の意識を最大限に活かして、細部の形、あるいは表面
の処理など、様々な道具を使用し、仕上げ彫りの段階に移行していく。カービングにおいても、モデリン
グ同様に確認作業を重視して、加工する素材が自身のエスキースから、どのように変容していくかを感
覚的に実感することが重要である。

(4) 教育の成果(教育方法を行った結果、どうだったか？)

上記に述べた教育方法を実践させた結果、立体表現における、三次元の立体がどのように形として
現れて成立しているかを体験できることは、学生自身にとって、美術の分野において、経験の少ないリ
アリティのある世界として実感できる良い機会である。また、触覚的な芸術としての量感ある物質の塊と
しての重量感や、出っ張り、へこみの山谷の凹凸を触覚芸術として感じ取れることで、空間認識も発達
してくるこの意味は大きい。

(5) 今後の目標(以上を踏まえて、今後どうするのか？)

空間認識や、三次元のリアリティある世界を体感したことで、表現の幅を広げ、さらに表現することが可能な素材を自分自身で探究し、新たな加工方法や、視覚的な色彩感なども含め、見え方のバリエーションなど、空間意識のさらなる領域を開拓していくことで、自身のオリジナリティと創造性を高めていってほしいと思っている。



R7 年度 4 年生 卒業制作木彫作品 クス材



同左 卒業制作作品展 せんだいメディアテーク



R7 年度 3 年生 前期 人体塑造作品
石膏取り準備、切金打ち



同左 石膏取り



R7 年度 1 年生 前期 ダンボールによる箱庭作り
作品



同左